

黙示録19章 「イエス・キリストの現れ」

1A 天における祝宴 1-10

1B 大淫婦の滅び 1-5

2B 子羊の婚姻 6-10

2A 王なる主の戦い 11-21

1B 馬に乗られた方 11-16

2B 神の大宴会 17-21

本文

黙示録19章です。ついに私たちは、黙示録全体のクライマックスの場面に入ります。黙示録が、「イエス・キリストの黙示」という言葉で始まりました。まさに、ここでイエス・キリストが現れる、顕現します。この方が、栄光と力をもって地上に現れ、獣とその軍勢を一気に滅ぼされます。

1A 天における祝宴 1-10

私たちは、前回の 18 章を思い出さないとはいけません。地上で人々を腐敗させていたバビロンが、一気に倒壊しました。地上の者たちは、その女が火で焼かれて滅んでいるのを嘆き悲しんでいましたが、天に対しては、喜びなさいという呼びかけがありました。「18:20 天よ、この都のことで喜べ。聖徒たちも使徒たちも預言者たちも喜べ。神があなたがたのために、この都をさばかれたのだから。」とありました。19 章は、この呼びかけに呼応して、大歓声が天に起こるところから見ます。

1B 大淫婦の滅び 1-5

¹ その後、私は、大群衆の大きな声のようなものが、天でこう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救いと栄光と力は私たちの神のもの。」

大バビロンが倒壊した後に、この大群衆の歓声が聞こえます。彼らは、誰なのか？これは直前に、御使いが叫んでいる声の中にあります。「18:24 この都の中に、預言者たちや聖徒たちの血、また地上で屠られたすべての人々の血が見出されたからである。」血を流した殉教者たちです。

彼らが歓声を上げて、神をほめたたえています。「ハレルヤ」は、神を賛美する意味です。そして、「救い…は私たちの神のもの」と叫んでいますね。7 章にて獣の現れによって、殉教した者たちの姿が天にありました。「7:9-10 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」彼らは、大患難の中で殺されました。けれども、子羊の血によって洗われた人々であり、殺されましたが、魂は救われて、天で神とキリストの前に立っているのです。こ

こ 19 章で大群衆が、まず、この救いが、私たちの神のものであると叫んでいます。改めて、私たちは、まことの救いは今の物理的状況からの救いではなく、魂の救いであることが分かります。

そして、ここでバビロンを滅ぼしせしめた神の「栄光」をほめたたえています。大バビロンのせいで、神の栄光を人々に見せなくさせて、自分に引き寄せていました。しかし、今、取り除かれ、ただ神のみに栄光が輝いています。そして、「力」が神のものであると言っています。あれだけ力ある都だったのに、一日にして崩れさせる力を神は示されました。

² 神のさばきは真実で正しいからである。神は、淫行で地を腐敗させた大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされた。」

黙示録では、これほどの激しい災いが地上に下っているのは、何のためかについて明確に、天における言葉で示しています。それは、神が真実で正しいから、ということです。6 章における殉教した魂は、「6:10 聖なるまことの主よ」と叫びました。15 章で、最後の七つの災いが下る前に、天において、「15:3 あなたの道は正しく真実です」「15:4 あなただけが聖なる方です。…あなたの正しいさばきが、明らかにされたからです。」と歌っています。

私たちが、この地上で柔和でいることを神はみこころとしておられます。神こそが裁きを行われる方であり、その裁きは正しく、真実なのです。だからこそ、私たちは主に裁きを任せ、困難を耐え忍ぶ力が与えられます。(詩篇 37 篇参照)そして、この黙示録の朗読を聞いていた兄弟姉妹は、過酷な迫害に耐えていました。その流された血に対して、主は必ず報いてくださいます。

そして主は、地を淫行で腐敗させたことで、大淫婦を裁かれます。主は、「地」に対して心を留めておられます。そこで、不正な血が流されること。淫行のような腐敗が行われること。そうしたことで汚れてしまった土地を裁きによって一掃してくださいます。ちょうど、ノアの時代に洪水によって地上を一掃されたように、です。

³ もう一度、彼らは言った。「ハレルヤ。彼女が焼かれる煙は、世々限りなく立ち上る。」

煙が世々限りなく立ち上っています。今、ここで賛美しているのは、大バビロンが自分たちを苦しめることはもはやなく、それが世々限りなく続くということです。しばしば歴史は繰り返されると言われますが、主にあってはこの負の歴史に終止符を打たれます。つまり、この永遠の裁きは、彼らの永遠の救いを保障しているのです。

⁴ すると、二十四人の長老たちと四つの生き物はひれ伏して、御座に着いておられる神を礼拝して言った。「アーメン。ハレルヤ。」

4 章から天の御座の周りに登場していた、二十四人の長老たちと四つの生き物です。天におられる神への礼拝において、彼らがしばしば登場していました。今ここで、再び礼拝の導き手として現れています。

⁵ また、御座から声が出て、こう言った。「神のすべてのしもべたちよ、神を恐れる者たちよ、小さい者も大きい者も 私たちの神を賛美せよ。」

主ご自身が、彼らの礼拝に呼応して、すべてのご自分のしもべに賛美せよと、促しておられます。人だけでなく、天にいる存在、御使いたちも含めて、この方を恐れるすべてが神を賛美せよ、ということなのです。

2B 子羊の婚姻 6-10

こうして、淫行で地を腐敗させた大淫婦は滅ぼされました。次に天においては、子羊との婚姻が行われます。黙示録の最後は、この二つの対比です。地上の王たちと淫行を働く大淫婦が滅ぼされ、天において子羊と清純な花嫁が結婚し、そして一体となるのです。神への反抗と偶像礼拝の象徴であるバビロンが滅び、神のものとされた、神に忠実な者たちが住むエルサレムが永遠に立つ、という流れで、歴史が完成します。

⁶ また私は、大群衆の声のような、大水のとどろきのような、激しい雷鳴のようなものがこう言うのを聞いた。「ハレルヤ。私たちの神である主、全能者が王となられた。」

「全能者が王となられた」と叫んでします。もはや大淫婦のいない中で、この方のみが支配されていることを賛美しています。

⁷ 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。子羊の婚礼の時が来て、花嫁は用意ができたのだから。

天において、子羊であるイエス・キリストとの婚礼の時が来ました。花嫁の用意ができたと言っています。この花嫁は、明らかに教会です。私たちは、2 章と 3 章で、七つの教会に対するイエスのみことばを聞きました。4 章と 5 章では、天に引き上げられている教会の姿を見ました。そして 6 章から反キリストが現れて、あらゆる災いが始まりましたが、その中で殉教する聖徒たちを見ました。彼らは、教会が引き上げられた後に信仰を持ち、殉教した聖徒たちです。そして今、天に住んでいた教会の聖徒たちが、連れて来られています。ついに、自分たちの愛する主と結婚するのです。

午前礼拝でじっくりと学びましたが、私たち教会は、キリストに結ばれているのに、まだ結ばれていないという、一種の矛盾、あるいは緊張状態にいます。もう救われたのに、救いの完成は将来を待ちます。だから、絶えず葛藤があります。イエスを信じた瞬間に天に引き上げられるとか、ある

いはイエスを信じた後にすぐに神の国が到来するとかなれば、はっきりしているのですが、そうではないのです。私たちは、この世から離れて、世と関わらないというのも間違っているし、世に関わって、世直ししようとしたりするのにも間違っています。

けれども、それは婚約という状態であると知れば、よくわかりますね。特に、当時のユダヤ人の結婚では、婚約は結婚と同じようにみなされます。その間に姦淫を犯せば、姦淫の罪として殺されるという厳しいものだったのです。ですから、あたかも結婚しているのですが、まだ結ばれておらず、いわば宙ぶらりんなのです。けれども、その間に、花嫁は、いわゆる花嫁修業をします。結婚生活における準備をしっかりと行っていきます。そして、花婿に引き取られる夜、衣装を整えて、乙女たちと共に、じっと待っているのです。

だから、主が教会のために来られる出来事、いわゆる携挙は、私たちにとっては救いの完成そのものであり、熱心に待つものであり、そのために整えているのです。この目標がなくして、キリスト者の地上における生活はできません。パウロはこの時期を、エペソ 5 章で「5:26-27 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」

⁸ 花嫁は、輝きよい亜麻布を まとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」

花嫁の衣装に注目しています。「輝きよい亜麻布」というのは、神の栄光を反映しています。これまで、何度となく、白い衣が出てきました。大淫婦が、紫と緋色の豪華な衣をまとっていたのに対して、花嫁はそうではありません。多くの神々を、神以外のものとなつがっていた大淫婦に対して、聖徒たちはただキリストとだけの結びつきを大事にします。

そして、「その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである」と強調しています。私たちが、主を信じる信仰によって義と認められました。その者たちが信仰をもって生きる時に、正しい行いをしていきます。それは自分たちではなく、主が用意された良い行いですが、与えられた義を実践していきます。その行ないが、主の前では、きよい麻布のようにみなされるのです。パウロは、このキリスト者の営みを、「エペソ 4:24 真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」と言っていました。すでに新しくされているのですが、その性質を身につけていくのです。

私たちキリスト者は、とても不思議な状況に置かれています。それは、キリストに形造られた新しい人は、自分には不自然に思えるからです。いつも口汚くののしったり、悪口を言っていた人が、キリストにあって賛美し、感謝して、恵みのことばを語るの、不自然に思えるでしょう。けれども、御霊によって新しく生まれている人は、実は、後者、すなわち賛美し、感謝し、恵みのことばを語る

ことのほうが、自分にとって自然なのだとだんだん気づくのです。そして、慣れ親しんでいた古いことが、どうもぎこちなくなり、やりたくなくなっているのに気づきます。これが、聖徒たちの正しい行いです。その正しさはキリストご自身の義であり、私たちのものではありません。けれども、その与えられた義が、自分の生活の中で定着していくのです。

⁹御使いは私に、「子羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ、と書き記しなさい」と言い、また「これらは神の真実なことばである」と言った。

婚姻ではなく、婚宴とあります。披露宴です。結婚式があり、それから披露宴があります。ユダヤ人は婚礼を行い、婚宴を七日間行ないますから、盛大なものです。カナの婚礼での奇跡は、まさにこの婚礼の中で起こった出来事です。

婚礼は天において行われるが、婚宴は主が地上に戻られて、神の国を立てられる時に行なうと思われます。主が、こう言われたからです。「マタイ 8:11 あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。」そこに招かれている者は幸いであります。

そしてイエス様は、最後の晩餐において、次にぶどう酒を飲むのは神の国が来る時だと言われています。「ルカ 22:16-18 あなたがたに言います。過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をすることは、決してありません。」そしてイエスは杯を取り、感謝の祈りをささげてから言われた。「これを取り、互いの間で分けて飲みなさい。18 あなたがたに言います。今から神の国が来る時まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、決してありません。」言い換えれば、主が再び来られて、神の国を建てられたら、共にぶどう酒を飲まれて食事をされるということです。その時までは、私たちは主の死を覚えて、パンとぶどう酒にあずかるのです。

そして、「神の真実なことばである」と言っています。あまりにも良い話なので信じがたいからです。けれども、太鼓判を押しているのです。22章でも、新しいエルサレムについて、「22:6 これらのことばは真実であり、信頼できます。」とあります。信じられないから、真実だと太鼓判を教えているのです。ですから、私たちはこれを真実なものと受け入れて良いのです！

¹⁰ 私は御使いの足もとにひれ伏して、礼拝しようとした。すると、御使いは私に言った。「いけません。私はあなたや、イエスの証しを堅く保っている、あなたの兄弟たちと同じしもべです。神を礼拝しなさい。イエスの証しは預言の霊なのです。」

この姿があまりにもすばらしいので、使徒ヨハネでさえが、神以外のものにひれ伏そうとしました。ですから、どれだけイエスご自身の栄光からそれて、他のものを拝んでしまうか、その弱さを人間が持っているのだと言ってよいでしょう。コルネリウスが、神を敬っていたので、ペテロが来た

時にひれ伏そうとしてしまって、ペテロが止めさせたことを思い出してください。敬っている以上に、拜んでしまうことをしてしまうのです。

これまで黙示録で、御使いは主ご自身ではないかと思われる程の栄光の輝きを反映していました。ですから、その輝きをみてひれ伏そうとしたのです。これだけ、神の栄光だけを見ていく、栄光を神だけにしていくということが難しいとも言えますね。ユダヤ人は、神殿に栄光を現す神ではなく、神殿そのものを偶像視してしまいましたし、栄光の源ではなく、その反射しているものを拜んでしまいます。そこで、御使いが厳しく、自分はあなたと同じ兄弟であり、神のしもべなのだと言います。

それから、「イエスの証しは預言の霊なのです」ヨハネは、この黙示録を、イエス・キリストの黙示という言葉から始めました。神の啓示、預言は全て、イエス・キリストを証しするものであるということです。ところが、ヨハネが今、御使いを拜みそうになったように、私たちは、イエスご自身から、それ以外のものに逸れてしまう誘惑があります。主が言われました、「ヨハネ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているものです。」そして、よみがえられてからも話されました。「ルカ 24:27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」

聖書預言を調べている時に、私たちが他のことに逸れていくことは危ういことです。ある人は、獣の刻印は何を指しているかに没頭します。また、多くの人が反キリストが誰であるかを追求しようとします。しかし、そこに聖書預言の目的はありません。イエスこそが、預言の霊であります。次、11節以降、イエスが栄光と力を身にまとして、天から地上に来られる幻があります。その一つ一つに、私たちは目を留めないといけません。

2A 王なる主の戦い 11-21

1B 馬に乗られた方 11-16

¹¹ また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かに真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

「天が開かれているのを見た」とヨハネは言っています。以前、ヨハネは同じように「天が開けた」幻を見ました(4:1)。その時は天に引き上げられ、神の御座をヨハネは見ましたが、今は、天から主ご自身が戻って来られる姿を見えています。

そして、「白い馬がいた」とあります。私たちは既に、白い馬については黙示録 6 章で見ました。その馬が現れた後で数々の災いが降りかかります。患難が始まったのです。その白い馬はまさしく、偽キリスト、キリストに似せて非なるものであることを知りました。平和と言いながら、破滅をもたらす者です。

しかし、こちらは本物です。本物のキリストは戦われて、それを終結させます。馬に乗って来られることについて、ゼカリヤ書 6 章で、馬と戦車が諸国の民に神の怒りを現わすために遣わされています。異邦の諸国に戦われて、「わたしの霊を鎮めた。(8 節)」とされています。これは、戦いのために先頭に立つ王、そして諸国を征服する王の姿であります。獣が率いる世界の軍勢に対してイエスは戦われます。力をもって彼らの横暴を制し、やめさせます。

ペルガモンの教会に、バラムの教えを奉じている者たちがいたので、「悔い改めなさい」と言われた時に、悔い改めない者たちに対する対処を思い出してください。「2:16 そうしないなら、わたしはすぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦う。」と言われました。これからの場面です。主が、悔い改めない者たち、バラムの教えを奉じている者たちに対して、戦われます。

そして、イエス・キリストの現れにおいて特徴的なのは、この方が様々な名によって呼ばれていることです。この名においてこの方の栄光が現れており、私たちはこれを見つめていく必要があります。そして、敵がキリストのどのようなことに対して敵対しているのかを知ることができます。

初めに、「確かに真実な方」であります。3 章 14 節に、「アーメンである方、確かに真実な証人」という方としてラオディキアの教会に対して現れていました。獣は、その逆と言っていいです。平和を約束しながら、それを裏切ります。契約を破る者です。しかし、私たちの主イエスは裏切らない方です。主は、偽りをいう勢力に対して、真実をもって戦われます。

そして、「義をもってさばき、戦いをされる」ということです。獣は、「聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許された。」とありました(13:7)。それは神を冒瀆する、神に言い逆らう中での戦いです。しかし、主は義をもってさばかれるために、戦われます。私たちは、戦いといえば、悪い欲望によって起こされると思います。事実、そのような戦いが非常に多いからです。「ヤコブ 4:1 あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るではありませんか。」しかし、これらの不義の戦いに対して、主は義による戦いをもって、戦争を終結させます。恒久的な平和という言葉がありますが、まさに永遠の平和をもたらします。

¹²その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

主は、「燃える炎」の目を持っておられます。使徒ヨハネが初めに、イエスの栄光の姿を見た時に、その目が燃える炎であったことを述べています(1 章)。主は、全てのことをお見通しになる方であり、それにしたがって公正に裁かれる方です。この燃える炎の目によって、獣は、生きたまま燃える火の池の中に投げ込まれます。

そして、「その頭には多くの王冠」があるといいます。ゼカリヤ書6章において、大祭司ヨシユアが複数の冠が重なっている冠をかぶる幻があります。それは、キリストを示していたからです。これは、イエスが王の王であられるということです。このことに反抗しているのが、獣と世界の王たちです。全ての王権、権威や権力、威光、富、位が一人一人に与えられていますが、しかし、それらをすべて掌握しておられるのが、イエス・キリストです。王も自分の上に王がいるのです。それを受け入れず、自分こそが王でありたいと欲して、神の権威に戦いを挑んでいるのです。私たち一人一人も、人生においてこの方を王としてあがめ、ひれ伏して従うのです。

そして、「ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた」とあります。名というのは聖書において、その人物の本質を示します。ですから、神の御名と言う時には、神の本質、その名誉、あらゆる尊厳がそこに含まれています。どんな人にも知らされていないものを、主は持っておられます。イザヤは、この方を「不思議な助言者」と呼びました(9:6)。そして主イエスは、御父に祈られた時に、「子がだれであるかは、父のほかはだれも知りません。(ルカ 10:22)」と言われました。

そして、名を付ける時に、その名を付けている人が所有する、支配するという意味合いがあります。アダムが動物に名をつけましたね。ですから、イエスに誰にも知らない名があるというのは、父なる神ご自身にしか支配されていない、人にはいっさい支配されないことを示すのです。イエスは、「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。(ピリピ 2:9)」とされています。

このことに対して、獣はどんな名が与えられていたのでしょうか？「13:1 その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。」すべての名にまさる名に対して、冒瀆することに満ちていたのが獣、反キリストです。

¹³ その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

ここにおいて、「血」は罪の贖いのための流されたものではなく、返り血です。イザヤ書にその預言の背景が書かれています。「63:1-4「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」「なぜ、あなたの装いは赤く、衣はぶどう踏みをする者のようなのですか。」「わたしはひとりでぶどう踏みをした。諸国の民のうちで、事をともにする者はだれもいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。彼らの血の滴りはわたしの衣にはねかかり、わたしの装いをすっかり汚してしまった。復讐の日がわたしの心のうちにあり、わたしの贖いの年が来たからだ。」ご自分に反抗し、戦いを挑む者たちに対して主は、戦われます。

そして、イエスの名が、「神のことば」です。ヨハネは福音書で、「1:1-2 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」と言いまし

た。主は、物理的な武器を使って敵に戦われるのではありません。神のことばによって戦われます。イエスは神のことばを語られ、またご自身が神のことばです。獣たち、反キリストの勢力は、神のことばと、真理であるイエスを嫌がって、それで戦いを挑みます。

¹⁴ 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

ここの「天の軍勢」とはだれのことでしょうか？8 節です、「花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された。」教会のことです。私たちは大患難の前に引き上げられ、子羊との婚姻を経て、主とともにこの地上に戻ってきます。ユダの手紙には、「見よ、主は何万もの聖徒を引き連れて来られる。(14 節)」とあります。そして聖書には、聖徒たちの他に天使たちも戻ってくるということが書かれています。第二テサロニケ 1 章 7 節に、「主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れる」とあります。ですから、教会や聖なる御使いと共に、主は戻って来られるのです。「コロサイ 3:4 私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。」

そして、「白い馬に乗って彼につき従った」とありますね。付き従うだけで、戦いません。主がひとりで戦われるからです。先ほど読んだイザヤの預言の続きにはこうあります。「63:5-6 見回しても、助ける者はだれもなく、支える者がだれもないことに呆然とした。それで、わたしの腕がわたしの救いとなり、わたしの憤り、それがわたしの支えとなった。わたしは怒って諸国の民を踏みつけ、わたしの憤りをもって彼らを酔わせ、彼らの血の滴りを地に流れさせた。」そう、主ご自身のみが救いをもたらします。私たちが主を助けることもなく、そんなことはできませんでした。ご自身が戦われるのです。

¹⁵ この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

主は口からの剣によって、諸国の軍隊を打ちます。ここの「剣」のギリシア語は、バルカン半島のトラキア人の使っている、非常に長い剣のことです。メシアについての預言で、主が口をもって戦われることが書いてあります。「イザヤ 11:4 正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。口のむちで地を打ち、唇の息で悪しき者を殺す。」

今、初めに来られた主は、地上においてこの剣を隠しておられました。「49:2-3 主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私をかくまい、私を研ぎ澄まされた矢とし、主の矢筒の中に私を隠された。そして、私に言われた。「あなたはわたしのしもべ。イスラエルよ、わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現す。」」イエスの言葉は、へりくだった言葉、柔和な言葉でありましたが、そこに塩がきいていたのはそのためです。心が刺されるようでもあります。私たちが滅ぼされることはありません。それは、矢筒の中にご自身の剣を隠しておられたからです。しかし、その言葉には力

がありました。黙れと言われたら、悪霊は退くし、嵐も静まります。この力あることばを完全にふるまわれるのが、終わりの日です。

そして、主が神の御国の王となられるとき、この方は牧者のように世界を支配されます。むちあるいは杖は、過ちを正す時に使われます。「1コリント 4:21 あなたがたはどちらを望むのですか。私はあなたがたのところへむちを持って行きましょうか。それとも、愛と優しい心で行きましょうか。」とパウロは、コリント人を戒めるために話しました。ここ、イエスが来られた時には、鉄の杖です。反逆する者に対しては、容赦なく打つために用いられます。詩篇二篇 9 節に、「あなたは鉄の杖で彼らを牧し 陶器師が器を砕くように粉々にする。」とあります。

そして、教会にも主が治める権威が任されます。ティアティラの教会に対して、勝利する者たちにこのように約束されました。「2:26-28a 勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。彼は鉄の杖で彼らを牧する。土の器を砕くように。28a わたしも父から支配する権威を受けたが、それと同じである。また、勝利を得る者には、わたしは明けの明星を与える。」

そして、「全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれる」と言われます。これも、黙示録の中で出てきました(14:18-20)。主が敵どもを押し潰され、それで敵の軍勢の血があふれます。後で、神の大宴会における凄惨な光景でこの場面が現れます。

¹⁶ その衣と、もものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

ここの「王の王、主の主」のギリシア語は、王も主も大文字になっています(BΑΣΙΛΕΥΣ ΒΑΣΙΛΕΩΝ ΚΑΙ ΚΥΠΙΟΣ ΚΥΠΙΩΝ)。英語では、すべて大文字で LORD OF LORDS, KING OF KINGS となっています。主の栄光の完全な現われです。ここで分かるように、反抗する諸国の王たちと対等に戦わるのではありません。完全に、ご自分に従属している者たちであるはずなのが、反抗して戦いに挑んでいるのですから、勝ち負けではなく、ただ愚かの一言に尽きます。主はこのような形で、全世界に対してご自身が王の王、主の主であることを明らかにされます。すべて隠れたことは、明らかにされます。主は、すべてを公正に裁いてくださいます。

2B 神の大宴会 17-21

ところで、先ほど、子羊の婚宴ということで、神の国における祝宴を見ました。主が最後に戦われる、また別の宴会があります。神の大宴会と呼ばれます。

¹⁷ また私は、一人の御使いが太陽の中に立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛んでいるすべての鳥たちに言った。「さあ、神の大宴会に集まれ。¹⁸ 王たちの肉、千人隊長の肉、力ある者たちの肉、馬とそれに乗っている者たちの肉、すべての自由人と奴隷たち、また小さい者や大き

い者たちの肉を食べよ。」

とても凄惨な光景です。その宴会は、イエスによって滅ぼされた軍隊の肉です。その肉にあずかっているのは、猛禽です。

これはハルマゲドンの戦いの最終段階で起こります。「一人の御使いが太陽の中に立っている」とあります。イエス様が 1 章 16 節で、太陽のように輝いていましたが、この御使いがその栄光を反映しています。そして、御使いが全ての鳥に命じます。小さい者、大きい者、自由人と奴隷、すべてというところに無差別だということです。神のさばきは、それを免れるものはいません。王から軍人、馬、すべて残らずということです。

イエスはこのことを、既に弟子たちにお語りになっていました。「死体のあるところ、そこには秃鷹が集まります。」とあります(ルカ 17:37)。福音書の読者は、この主のことばがあまりにも突拍子もないので戸惑うのですが、いや、聖書の預言には、神のさばきとして、殺された者たちの死体がそのままに捨て置かれる姿が描かれています。

当時、今もそうだと思いますが、中東の人々は殺される以上に、自分の面子が潰されることを恐れます。死んだときに、丁重に葬られているかどうか、とても大切にされます。列王記や歴代誌には、それぞれの王が王たちの墓に葬られるのか、そうでないかが、その人が主と共に歩んでいたかそうでないかで変わっているのをみます。また、預言者エレミヤは、神のさばきが現れる時に、「エレミヤ 7:33 この民の屍は、空の鳥や地の獣の餌食となるが、これを追い払う者もない。」と言いました。ゴグの戦いにおいても、彼らが鳥の餌食になる裁きがエゼキエル書 39 章 17 節に書かれています。ですから、そのまま肉体が捨て置かれ、しかも猛禽に喰われるというのは、最もあってはならないことです。これを神が行われるのです。

¹⁹ また私は、獣と地の王たちとその軍勢が集まって、馬に乗る方とその軍勢に戦いを挑むのを見た。

黙示録では、まずバビロンに対する裁きが書かれていました。獣と他の王たちが、女を憎みそれを倒しました。それも、神ご自身が意図されていたことでした。宗教的バビロンは倒れました。そして商業的バビロンは、大地震によって倒壊し、火によって焼かれます。最後に彼らはハルマゲドンに集結して、そして最後の戦いを行なうのです。

そしてこれが、最後の場面です。世界中から集まってきた諸国の軍隊は、バビロンを倒し、また、ハルマゲドンに集結します。そしてボツラ、あるいはペトラにいるユダヤ人たちを滅ぼそうとします。そのときにイエスさまが戻ってこられます。その戦いはエルサレムのほうに移り、エルサレムの住民は自分を助けてくださるメシアは、かつて十字架につけたナザレ人イエスであることを知り、悔

い改めます。そして世界の軍隊に対して主は鉄槌を加えられ、一気に滅ぼされます。主はオリブ山に立たれて、そのとき地殻変動と天変地異が起こります。神の国が建てられる準備ができました。そして、主は国々をさばかれて、ある者は永遠の地獄に、またある者は御国の中に入られます。そして、主はエルサレムから世界を君臨されます。

²⁰ しかし、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。

世界を惑わし、荒廃へと至らせた獣と、獣を拝むように仕向けた偽預言者は、ここでさばきを受けます。刻印を受けた者たちも裁かれます。生きたままゲヘナの中に投げ込まれます。覚えていますか、13章にて獣は、「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。(4節)」と世界中の人から、あがめられました。しかし主の前では、このようにイチコロなのです！そして、「生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた」とあります。生きたままというのは、神の怒りの激しさを物語っています。扇動した者に対する裁きです。コラの反乱を思い出してください、彼らは生きたまま地面が割れて、陰府に突き落とされました。

²¹ 残りの者たちは、馬に乗っている方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が彼らの肉を飽きるほど食べた。

残りの者たちは、ゲヘナではなくこのように、死体が鳥によって喰われるという裁きを受けます。そして20章では、悪魔が底知れぬ所につながる話が出てきます。千年後に解放され、今度は悪魔自身が、ゲヘナに投げ込まれる話が出てきます。

このようにして、主は悪に対して裁かれます。イエスが、羊と山羊を選り分ける喩えを語られましたが、羊は御国の中に、山羊は地獄の中に投げ込まれます。このようにして、私たちは主の前に必ず立ち、いのちの道に至るか、滅びの道に至るかのどちらかであることを教えられています。子羊の婚宴なのか、神の大宴会なのか、どちらかです。